

ジャック・ラカンの欲望の理論

——欲望のグラフについて——

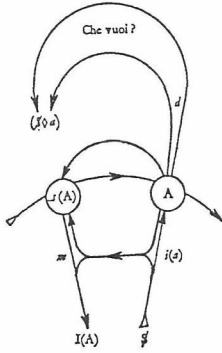
番 場 寛

ジャック・ラカンの欲望の理論の一部を説明するにあたって、予め「シニフィアン」という概念について説明しておきたい。ソシュールにおいてはこの「シニフィアン」とは「言語記号」の二つの側面のうち「表現面」をさす言葉である。よく誤解されがちであるが、「文字」や「声」はシニフィアンの支えであって、シニフィアンの「本質」は「実質」ではなく「形相」なのである。つまりほかの要素との「消極的」な関係によってしか存在しないものなのである。ソシュールがシニフィアンを「聴覚映像」と定義したのは、このシニフィアンの「形相」としての性質を強調したのだと思われる。

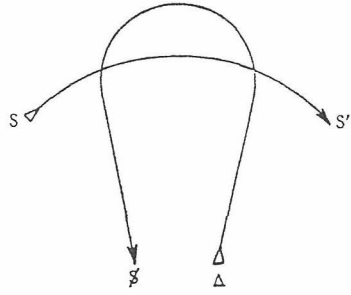
ではラカンのシニフィアンの概念はどのように定義でき

るであろうか？ ラカンは明らかにソシュールとは異なる範囲にまでシニフィアンの概念を拡張しているということからは容易にわかるが、ラカン自身のシニフィアンを定義するのは困難である。ラカンは「あるシニフィアンはもう一つのシニフィアンに対し主体を代理表象する」と言い、これ以外のシニフィアンの定義はないと断言した。この定義は同時にラカンの主体概念の特異性をも示しているように思える。♂と主体を表す記号が斜めの線を引かれているのは、主体が言葉に代表される象徴界に入ること、主体に、現実の肉体を備えた存在とシニフィアンの体系のなかに組み込まれて、シニフィアンの「結果（効果）」として生れる主体を表しているからである。

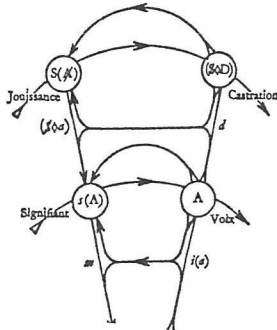
ラカンのセミナーにおいて「欲望のグラフ」と呼ばれるものが登場するのは、一九五七年から五八年にかけて行われた「無意識の形成物」と題されたセミナーと、その次の一九五八年から五九年にかけて行われた「欲望とその解釈」と題されたセミナーである。ただ両方のセミナーとも完全な公的に認められた出版物としては本発表時点においては、出版されておらず（「無意識の形成物」と題されたセミナーは一九九八年六月に出版された）、「欲望のグラフ」と呼ばれるものを、公的に見ることが出来るのは、一



グラフ 3

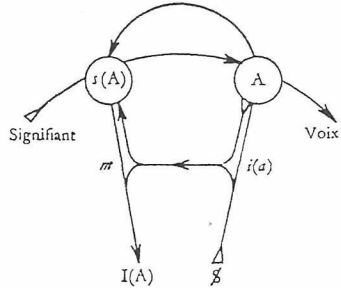


グラフ 1



グラフ 4

(完全なグラフ)



グラフ 2

九六六年に出版された「エククリ」に収められている「フロイトの無意識における主体の転覆と欲望の弁証法」という論文においてである。

これらの四つのグラフは、人間の心の中に「欲望」が生じてくる様を論理的に説明するために順を追って、単純なものから複雑なものへと発展している。グラフ1と2では、横をよぎる曲線と共にシニフィアンの連鎖を指している。また下から上に向かって伸び再び下に向かって戻ってくる曲線はともに、主体が何らかの「欲求」に駆られて、シニフィアンに働きかけようとする「志向性」を表している。グラフ1と2では主体Sの位置が「志向性」を表すヴェクトルの帰点から出発点に移っているという点で逆になっているが、「欲求」をシニフィアンで表現することと主体がシニフィアンとなることを表しているのがグラフ1であり、既に

言葉を話す主体、つまりそれ自身もシニフィアンの体系に組み込まれた主体がシニフィアンに働きかけると考えれば、グラフ2のようにになると考えられる。グラフ2の $i(a)$ は「他者のイメージ」を表し、 m は「自我」を表す。その二つがグラフの下の方で向かい合っているのは、幼児が鏡に写った自分の姿（それが「他者」の姿である）を見て自我を形成するという「鏡像段階」を経た人間の「想像界」の關係を表す。

この二つのグラフで最も重要であると思われるのは二つの曲線が交わる二つの個所である。この二つの個所の意味を、先に述べた二つのセミナーでの説明を参照するとその二つのセミナーでは、その二つの曲線の交差している個所をそれぞれ「コード」と「メッセージ」と説明していたことが分かる。しかし『エクリ』では、グラフ2のAは「コード」ではなく、「シニフィアンの宝庫の場」を意味しており、 $s(A)$ は「意味作用が終ったものとして構成される句読法」と説明している。つまりシニフィアンの連鎖はどこで句読点を打つかによって、そのシニフィアンの連鎖の意味することは全く違ってくるのである。

さてラカン自身はこれらの二つのグラフについて更に説明しているのであるが、これらのグラフにはまだ欲望のメ

カニスムは記されていない。それが記されているのはグラフ3からである。これはグラフ2と殆ど同じものに上の部分を新しく加えたものである。「シニフィアンの宝庫の場」としての「大文字の他者」の略号であるAから二本のヴェクトルが延び、その矢印の先には $S \diamond a$ (S barreé poinçon petit a) と記されている。これは最終的には「無 (rien)」とも考えられる「欲望の原因」でもある「欲望の対象」である「対象a」を前にして消え去った主体を表している。そこから戻ると二つの曲線の間には d と書かれており、これは「欲望」を表している。注目したいのは、その d の上にある疑問符のついた二つの単語 *Cher vuoi?* である。これは「J・カゾットの小説『恋する悪魔』という小説で、悪魔が現れるとき主人公に向かって発する言葉であり、これをラカンは「汝は何を欲するのか?」と訳す。ラカンは更にこれを「本当に汝自身の意志である欲望はあるのか?」と言い換えている。これは「人間の欲望は大文字の他者の欲望である」という定型表現で表せるラカンの欲望に対する考え方に基づいている。この「大文字の他者 (Autre)」とは「他人」をさすのではなく、「シニフィアンの宝庫」としての「場」をさすのであり、その「場」を現実には「母親」や、「父親」や「精神分析家」などが占めるので

ある。

さらに四番目の「完全なグラフ」を見ると、シニフィアンの連鎖を「意識的」なもの、「無意識的」なものとの二つの線で表していることと「要求」をいう概念を書き込んでいることが分かる。

これを踏まえた上で「欲望とはなにか」という問題を考えると、人は何らかの「欠如」により「緊張状態」に置かれた時、それから逃れようとする心の動きとしての「欲求」が生れ、これを満足させようとして「シニフィアンの宝庫」としての「大文字の他者」に働きかける。その時シニフィアンを操作しそれを他者に投げかけるのであるが、それが「要求」である。ラカンが「欲望は、要求が欲求から引き裂かれる余白で芽生える」と書いているのは、「欲求」から「要求」が生れたことにより、その「要求」がこんどはその「欲求」を「欲動」に変え、それから「欲望」が生じるのではないかと推論される。

ラカンが「欲望」のグラフを使って説明した「欲望」のこうしたメカニズムは、芥川龍之介の小説『芋粥』にも明らかに認められるのである。

「家政学」の誕生

——「家庭」の創出と家事の近代化——

関 口 敏 美

本報告では、日本における家政学の成立とその特質を検討するための準備作業として、明治二十年から三十年頃を中心に「家政学」誕生の背景的な要因を整理し、この時期に成立した家政学の特質を指摘してみたい。

常見育男『家政学成立史』（一九七〇）によると、明治期は、欧米の家政論を受容しながら家政学・家事教育の理念や内容の体系化が試みられた時期であった。特に明治二十年代以降は、在来の「伝統的家政書」と翻訳家政書を折衷した「日本の家政書」が登場し、近代的な意味での家政学が成立する。

「家政学」成立の背景には、家族と女性のあり方をめぐる社会意識の変容がある。

明治初年の戸籍制度により、全国民が戸籍に組み込まれ、国家の基礎単位としての家族が成立する。個々の家族は、